レッテル

岐阜市立三輪中学校 3年
樋口 沙良（ひぐち さら）

最近よく聞くようになった「不登校」や「LGBTQ」の言葉。多様性を求めて今、いろいろな言葉が作られ、広まっています。しかし、私はこれらの「言葉」をつくることについて疑問を感じています。それらの言葉が本当の意味で多様性のある社会に近づいている言葉なのでしょうか。

学校では、登校できない子は「不登校」として見られます。生徒の中でも、「あの子は不登校なんだ、今日もたぶん来ないんだろうな」と思われています。学校に来ないと「不登校」というレッテルを貼られ、その子が学校に来ると「珍しい」と思われてしまいます。するとその子はせっかく学校に来たのに、自分の教室に入りにくかったり、一緒に授業を受けにくくなったりしてしまいます。私は学校に行くか行かないかは、その子自身が選択ができると思います。「不登校」と呼ばれる子の中には、学校に行きたくても行けない子もいるし、自分は行かないと選択している子もいるはずです。しかし、その行かないと選択している子が学校に行きたくなった時、また行きたくても行けなかった子が行けるようになった時、周囲から「不登校」という言葉で決めつけられていると「行きづらい」と感じてしまうのではないでしょうか。「不登校」という言葉を作り、それによる周りの人の偏見によって、学校に行きたくても行きにくい、学校に行っても自分の居場所はない、そう思ってしまうのではないでしょうか。

また、先日こんな場面を見かけました。「俺、ゲイかもしれん」そういった子に対し、それを聞いた子は「えっ」「きもっ」「オカマやん」そう言っていました。「ゲイ」というだけで驚かれ、「きもい」と言われます。これもまた、「ゲイ＝きもい」「ゲイ＝オカマ」という偏見によって「ゲイかもしれない」と言った子が傷ついています。「LGBTQ」という言葉は確かに多くの人に広まりつつあり、その言葉でそういう人もいるんだと言うことをたくさんの人が知ることができる良さがあります。また、その言葉によって、周囲の人が知っていてくれているから安心して生活を送ることができるのかもしれません。しかし、どうでしょうか。いざ近くに「LGBTQ」の人がいると聞くと、驚き、自分がもつ偏見でその人を比較していないでしょうか。また、自分は「LGBTQ」を認知しているからといって、そんなつもりはなくても差別してしまってはいないでしょうか。

世の中の大多数を占める方が「普通」と言われ、それに当てはまらない方は「普通」ではない、つまり「特別」な人として見られます。学校に行くのは「普通」で、毎日行かない、行けない子は「不登校」と呼ばれます。また、体と心の性別が一致していて、異性を好きになるというのが「普通」で、体と心の性別が違ったり、好きになるのが同性だったりすると「LGBTQ」と言われます。「普通」と違うとすぐに新しい言葉を作ってそれに当てはめようとする、そんな社会を私は変えたいと思っています。いろいろな人が生活する中、「普通」と違うと言われて周りの人たちに偏見をもたれ、差別されている人がいます。そもそも普通とは何でしょうか。周りと違うことは悪いことでしょうか。それどころかそれも１つの個性なのではないでしょうか。自分という人間は世界中探しても自分しかいないし、誰一人同じ人はいません。だから、人間の中に「普通」も「特別」もないと思います。

多様性が認められる社会、それは誰もが望む社会です。そんな社会を創っていくためには、まず自分がどの人に対しても平等に接したり、どんな人でも受け入れたりすることを大切にしていきたいです。あの人はこういう人だと決めつけるのではなく、あの人にはこんな一面もあるんだとか、あの人のこんなところがいいなみたいに、それぞれの人の良さを見つけていきたいです。全ての人が生きやすい社会を創るために。